

〔直訳〕

24 そこで、群衆が見たとき 次のことを

イエスが いない。そこに、彼の弟子たちもいない、  
乗り込んだ 彼ら自身は 小舟の中へ、そして 来た カファルナウムの中へ  
捜しながら イエスを。

25 そして 見つけて 彼を 海の向こうで 彼らは言った 彼に、

「ラビ、 いつ ここに あなたは来た」。

26 答えた 彼らに イエスは そして 言った、

「まことに まことに 私は言う あなたたちに、

あなたたちは捜している 私を

あなたたちが見たからではない しるしを

そうではなく あなたたちが食べた パンから そして あなたたちは満腹したから。

27 **働くな** なくなる食物のために、

そうではなく 永遠の命の中へと留まる食物のために、

ところの 人の子が あなたたちに 与えるだろう。

なぜなら 彼を 父が 認証した 神が」。

28 そこで彼らは言った 彼に向かって、

「何を 私たちはなすべきでしょうか

ようにと **私たちが働く** 神の働きを」。

29 答えた イエスは そして 言った 彼らに、

「これは ある 神の働きで、

ようにと **あなたが信じる** 彼が遣わしたところの者を」。

30 そこで彼らは言った 彼に、

「そこでのような 行う あなたは しるしを、

ようにと 私たちが見る そして **私たちが信じる** あなたを

何を あなたは働くか

31 私たちの父たちは マンナを 食べた 荒野の中で、とおりに 書かれてある、

『**天からのパンを** 彼は与えた 彼らに 食べるために』。

32 そこで言った 彼らに イエスは、

「まことに まことに 私は言う あなたたちに、

モーセが 与えたのではない あなたたちに **天からのパンを**、

そうではなく 私の父が **与える** あなたたちに 天からの真のパンを。

33 なぜなら神のパンは ある 天から降るもの そして 世に命を与えるもので」。

34 そこで彼らは言った 彼に向かって、

「主よ、 いつも 与えてください 私たちに そのパンを」。

35 言った 彼らに イエスは、

「私は ある 命のパンで。

来る者は 私に向かつて 決して飢えない、

そして 私を信じる者は もはや決して渴かない」。

【新共同訳】

24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにはないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。25 そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。26 イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。27 朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」28 そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、29 イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じる」と、それが神の業である。」30 そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるよう、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。31 わたしたちの先祖は、荒野でマナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」32 すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。33 神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」34 そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、35 イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

①構成

① イエスが五千人にパンを与えた後、イエスより先に舟で出た弟子たちは、すでに暗くなった湖を歩いて来るイエスを見て恐れたが、イエスが「わたした。恐れることはない」と教えると、彼を迎え入れ、舟はカファルナウムに到着した。

② イエスを捜して来た群衆はイエスを見つけ、イエスと対話するが、この対話を通して、両者の間の隔たりが明らかにされる。両者の対話は一種の「尻取り」で展開されている。

「捜しながら」

「あなたたちは捜している↓働くな」

「私たちが働く↓神の働き」

「神の働き↓あなたたちが信じる」

「私たちが信じる↓天からのパン」

「天からのパン↓与える」

「与えてください↓そのパン」  
「命のパン」

尻取りのように、それぞれ相手の言葉を受けながら、群衆は尋ね、イエスは答えているが、同じ言葉が微妙にズレた意味で受け取られている。このズレがやがてイエスと群衆との決定的な決裂に結びついて行く。その時には、群衆はイエスに敵対する「ユダヤ人」になってしまう（52節）。

## ②かみ合うことのない対話

### ㉑ 群衆「捜す」（24—25節）

イエスが姿を消したと知った群衆は、小舟をこぎ出して向こう岸に渡る。24節には「見た」↓「乗り込んで」↓「来た」というように群衆の一連の行動が描かれているが、その目的が「捜しながら」という分詞形によって示される。イエスを捜すことが彼らの目的であったから、イエスを「見つけると」、彼らは「いつここに来たのか」と驚く。

### ㉒ イエス「捜す↓働くな」（26—27節）

㉑群衆は確かに熱心にイエスを捜しているが、イエスから見れば、彼らの「捜す」には欠けたところがある。群衆がイエスを捜すのは、パンを食べて満腹したからであって、「しるしを見た」ためではない。パンの奇跡は彼らにとっては欲求を満たす出来事で終わり、「しるし」とはなっていない。

㉑人の食べる食物には、「なくなる」食物と「永遠の命の中へと留まる」食物とがある。イエスは永遠の命と関わる食物のために働くようにと勧める。この「働く」は「食物を獲得するために働く」の意味だが、ここでの食物は「人の子が与える」食物であるから、「働く」という側面よりも、恵みとして「受ける」という側面が強く響く言葉となっている。

### ㉓ 群衆「働く↓神の働き」（28節）

しかし、群衆は「神の働きを働くようにと何をなすべきでしょうか」と尋ねる。彼らが考える「働く」は、労苦して自らの働きによって獲得することである。しかも彼らが口にする「神の働き（複数形）」は、神が私たちに求めている「働き」の意味であり、具体的には掟や神の指示を指している。彼らは永遠の命を得るには、神が指示する業を行わねばならない、と考えている。

### ㉔ イエス「神の働き↓信じる」（29節）

しかし、イエスは、神が遣わした者を信じるのが「神の働き（単数形）」だと答える。神が私たちに求める働きは「信じる」ことただひとつである。

### ㉕ 群衆「信じる↓天からのパン」（30—31節）

群衆は「あなたを信じる」ことができるようにと、「しるしを行う」ことを求め、「天からのパン」を人々に与えた預言者モーセを引き合いに出す。

### ㉖ イエス「天からのパン↓与える」（32—33節）

群衆が旧約から引用した「天からのパンを彼は与えた」という聖句の正しい読み方をイエスは教える。ここでの「彼」はモーセではなくて「私の父」と読むべきであり、過去形「与えた」ではなくて現在形「与える」と考えるべきである。イエスの考える「天からのパン」はマンナではなく、彼を通して神が与える教えである。

### ㉗ 群衆「与える↓そのパン」（34節）

モーセではなく、神が与えるパンと聞いて、群衆はそれを求めるが、彼らは食べる「パン」、彼

らの欲望を満たす「パン」を考えている。

h) イエス「命のパン」（35節）

だが、イエス自身が「命のパン」である。こうして、群衆とイエスの間の越えがたい溝が暴露されることになる。

③ 働く（エルガゾマイ）

新約聖書では41回使われるが、特にヨハネ文書でよく使われる（ヨハ8、2ヨハ・3ヨハ各1）。共観福音書ではマタイが4回で、マルコとルカは1回である。

①自動詞として、ごく一般的に「働く・仕事する」（マタニニ28など）、あるいは「生活に必要な物資を得るために稼ぐ」の意味（1コリ96など）。パウロは夜も昼も働き（1テサ29）、他人の施しをあてにせず、自分の手で「稼いでいる」（1コリ412）。アブラハムの信仰を論じるロマ書4章では、「働く」は同族語の名詞エルゴン（行い・業）と共に神学的な意味で使われ、「律法の行い」（ロマ328、四2）を指す。律法の行いによらず、信仰によって義とされたアブラハムは、「働きがなくても」神を信じて義とされた者であり、キリスト者の模範とされる（ロマ45）。ヨハネ5章17節、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」の「働く」は「活動する」を意味し、イエスと神の一体性が表される（五18）。

②他動詞として、「行う・成し遂げる・果たす」。同族語の名詞エルゴン（行い・業）（ヨハ628、マタニニ10など）、「善いこと」（ロマニ10）、「悪いこと」（ロマ三10）、「義」（使一〇35）、「神の義」（ヤコ一20）、「不法」（マタ723）、「罪」（ヤコ二9）などが目的語となる。そのほかに、「聖なる物事を行う」は、神殿祭儀の務めを果たすことを表す（1コリ913）。「悔い改めを行う」は、「悔い改めをもたらす」を意味する（2コリ710）。名詞サラツサ（海）の対格を伴う黙示録18章17節は、「生計のために海で働く」を意味する。

③ヨハネ6章24―35節では3回使われる。

④27節は文字通りには「食べ物のために働きなさい」を意味する。しかし、この「食べ物」は人の子が与える賜物であるから、「働きなさい」には「賜物を求めなさい・受け取りなさい」という意味が含まれることになる。

⑤28節の「神の業（複数形）を行う」は、「神が求めている様々な業を実行する」を意味する。

群衆はイエスの「働きなさい」という27節の呼びかけの真意が分からず、神が人に求める様々な指示や掟を満たさなければ、食べ物を得ることはできないと考えている。

⑥30節では、群衆は「何を働くのか」とイエスに尋ねて、彼を信じるためのしるしを要求する。

④ イエスとの溝に気づく

①群衆とイエスの会話は「いつここに来たのですか」と尋ねる群衆の問いかけで始まる。群衆がどのように尋ねたのは、イエスが湖の上を歩く方だと（16―21節）ゆめゆめ思わなかったからである。ズレの始まりはここにある。

②イエスは群衆の理解を越えたメシアである。だから、群衆が自分の思いや判断から抜け出せずにいれば、溝ができるのは当然である。信仰とは、この溝の存在に気づいて認め、自分の思いや判断を捨て、イエスの言葉が指し示す世界へと導かれることである。それを欠くなら、溝はますます深くなる。